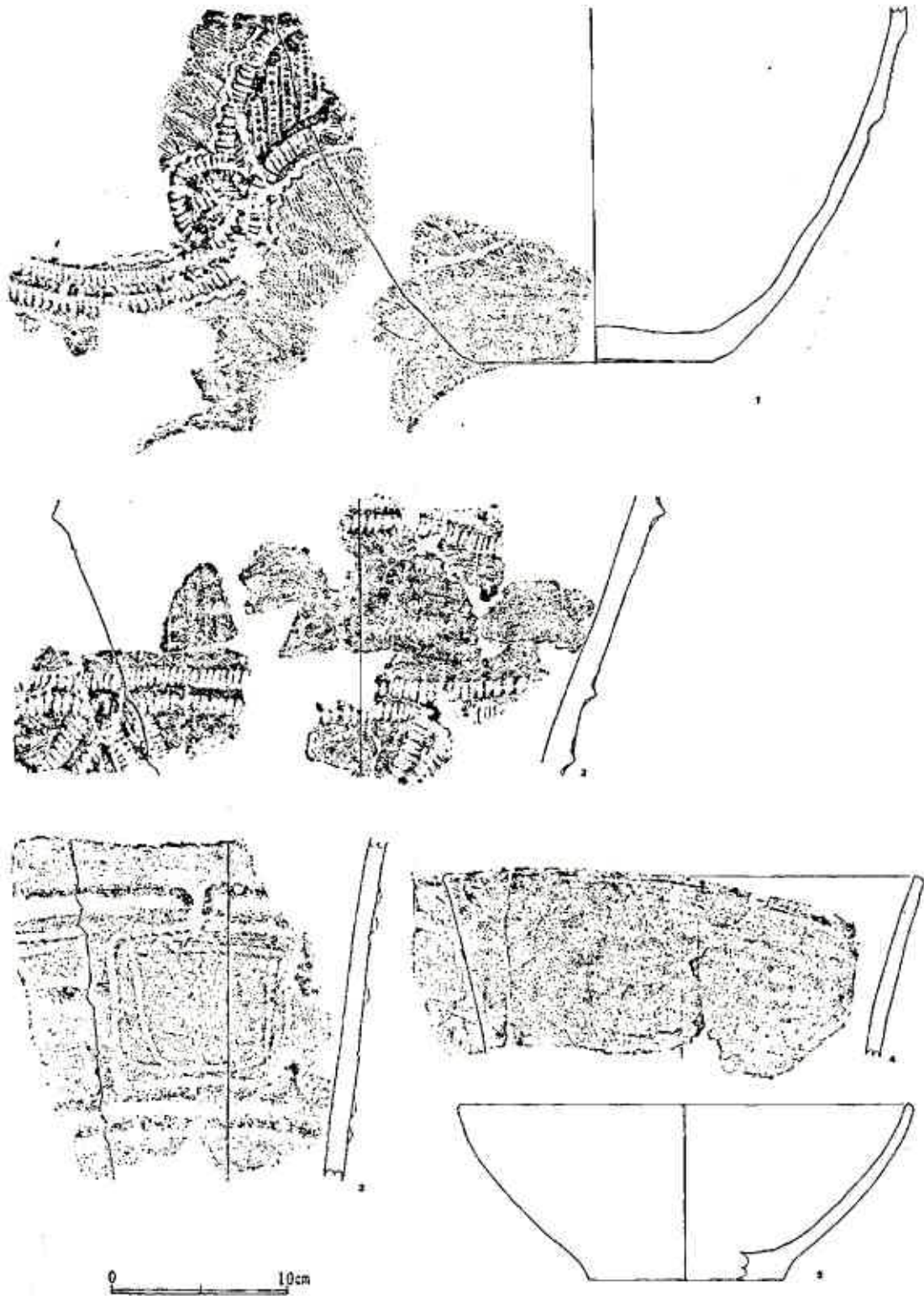
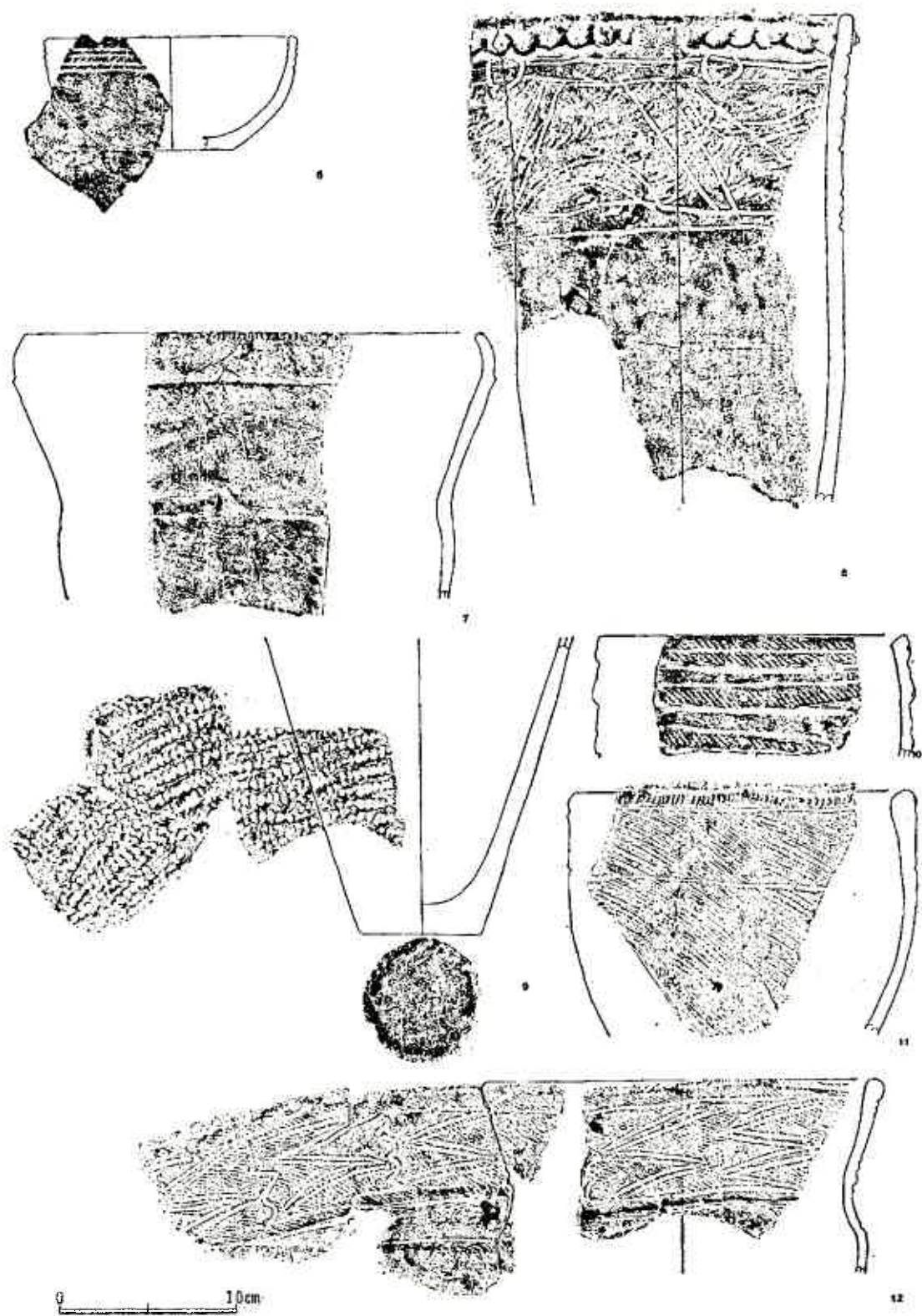


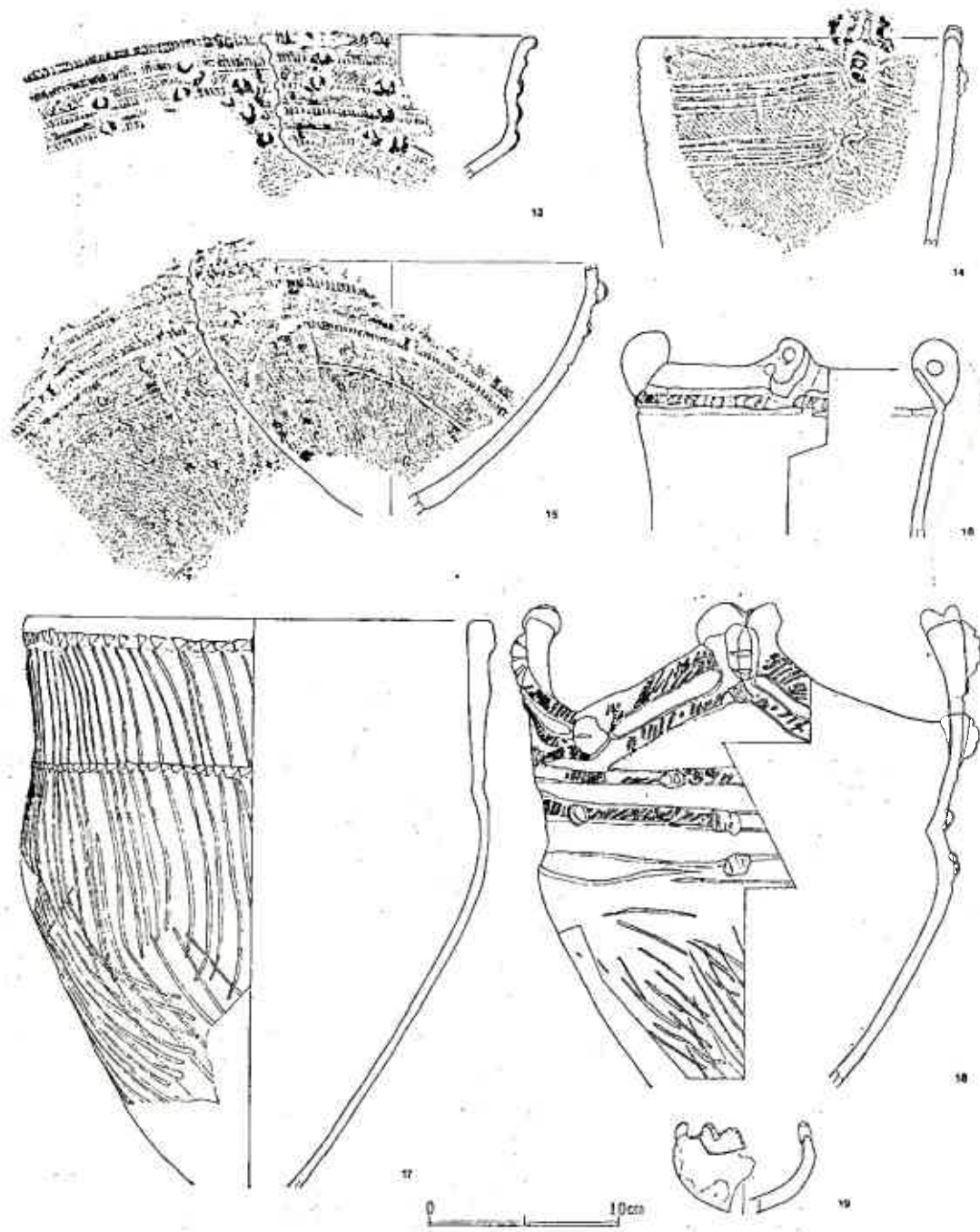
第34图 包含層出土土器拓影图(23)



第35図 埋甕及び包含層出土土器実測図(1)



第36图 包含層出土土器実測図(2)



第37图 包含層出土土器実測図(3)

一応Ⅲ a 式と思われるが、別掲第39図の文様モチーフに似ており、今後検討を要する。452、453は波状口縁の土器で、452には三叉文がみられる。453は縄文が施されていない。454～457は胴部破片で、457には胴部に隆帯がめぐらされる。458～466は紐線文系の土器で、口縁はわずかに肥厚するがあまり丸味をもたず、内傾する深鉢形土器となる。459、460、463は粘土紐を貼付した上に刻みを加える。459はレンズ状の区画内に刺突、464はLRの縄文が施される。458、461～463は刺突文が施されるもので、区画内には直線、曲線によって文様を描いている。496、497は同一個体で、東・北・南・部の晩期初頭のものに類似すると思われるもので、横長のレンズ状の縄文帯がみられる。また455についても東北系か。

467～482は無文土器で一応ここに入れたが、時期的には様々であろう。いずれも平縁の深鉢形土器となり、口縁部は肥厚するものやしないものがあり、内傾する。器面はナデが加えられている。467～470は口縁下に一条の沈線が施される。

第10類土器（483～495、496～504、506、507）

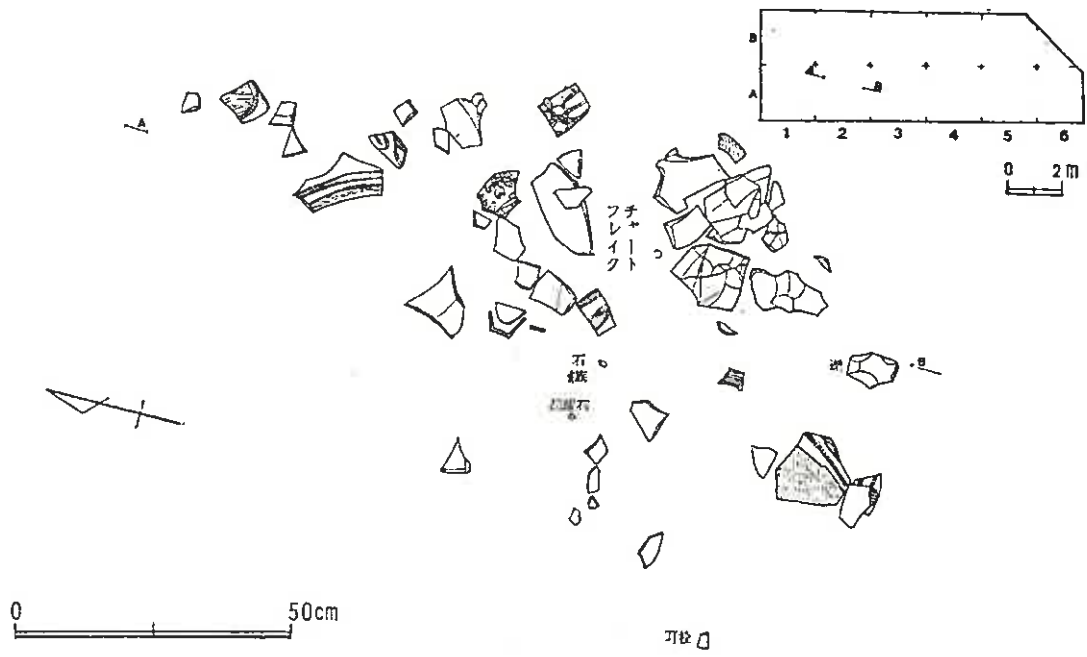
本類は安行Ⅲ b 式土器と思われるものである。いずれも深鉢形土器で、口縁はほとんど肥厚せず外反ないしは内傾気味となり、一度胴部でくびれをもつものもみられる。文様は沈線間にやや長目の刺突を施すもの（483～489、491、492、494、498～504、506、507）が大半を占める。また沈線間に縄文を施すもの（493）、細い沈線を施すもの（495）もみられる。496、497、492は同一個体とみられ、沈線をS字に配する。490、491は波状口縁の深鉢形土器で、490には貼付上に刺突が施され、491の波預部には粘土紐をハチマキ状に巻く。504の胴部には円弧文が施される。493、495は姥山式として把握されるものであろう。

第11類土器（505、508）

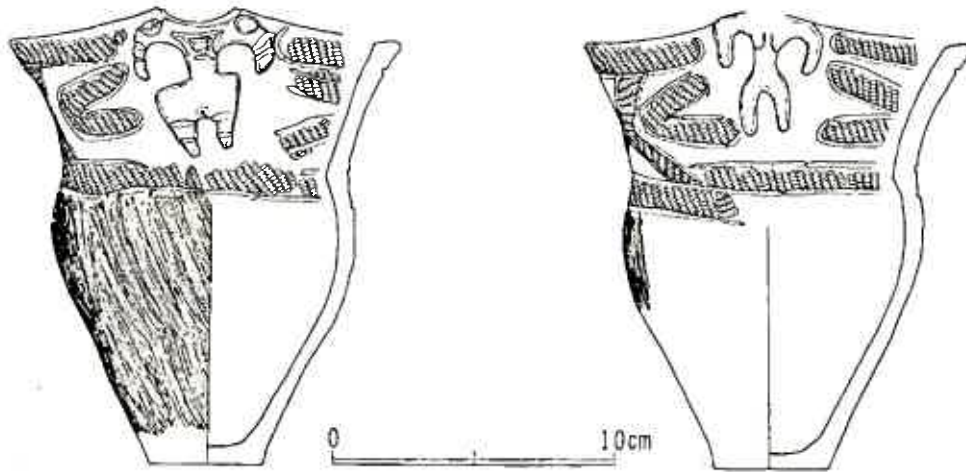
本類は安行Ⅲ c 式土器と思われるものである。口縁は丸頭状を呈し、肥厚はみられず、外反する。文様は入組文、三叉文がみられ、508の胴部には沈線間に刺突文が加えられる。505は台付土器、508は胴部で一度くびれる深鉢形土器と思われる。

（4）土偶装飾付土器（第39図）

この土器は、第I層とした茶褐色土層上面から他の土器とともに約1mの範囲から一括して出土したもので、その一括土器の中央付近に横に倒れ口縁部付近が周囲に飛



第38図 土偶装飾付土器出土状況図



第39図 土偶装飾付土器実測図

散したような状態であった。遺構等に伴うものかどうかは確認できなかった。

口径13.8cm、器高16.2cm（現存部）を測る深鉢形土器である。口縁部には両端に人体を模したと思われる貼付が一体ずつ二体が対となりみられる。いずれも頭部を欠損するため詳細は知り得ないが、一体はかなり具象化されており土偶を模したものであろうか。

その「土偶」のうち一方は、肩が張り胴部でかなりくびれ、上半身は逆三角形を呈している。腰はかなり張り、両足がやや内向しており、下半身も逆三角形に近い形を呈している。両手と両足には2本ずつの沈線がひかれ、肩には円形の文様が描かれる。胸には沈線によって二重に梯形の文様が描かれている。下腹部には男性性器を表わすと思われる突起がみられ、男性を表現したものであろうか。またもう一方は肩が張り、胴のくびれはみられるが腰の張りはほとんどみられず、前者に比して著しく細身である。胸には乳房の表現があり女性を表現したものであろうか。前者に比して体部その他にも装飾をもたない。頭はいずれも欠損しているが、「土偶」の土器への貼付からみると、口縁上に突起状につけられたものと思われる。「土偶」の器面への装着はしっかりととなされており、貼付後にヘラ状工具でしっかりとナデつけられている。文様は2つの「土偶」を中心として、描かれており、口縁部、くびれ部の縄文帯とその間に配されるX字状、くの字状の文様から成る。くびれ部をめぐる縄文帯は女性を表現したと思われる「土偶」の下から始まり、一周する間に一段下がっている。また男性を表現したと思われる「土偶」の下では一時沈線がひかれていない。男性を表現したと思われる方が女性を表現したと思われるものよりも大きく、それにかからないように引いたため一段下がるという結果になったものであろうか。

縄文はRLの原体を用い、口縁下、くびれ部の縄文帯は横方向に施文し、くびれ部の方は最後を縦に施文し文様を閉じているように思える。X字状に描かれた文様内では、右下がりの部分は右上から右下へ斜方向に、右下がりの部分は右下から左上へ斜方向の回転をし、圧痕が前者では「横」、後者では「縦」となるように意識的と思われる施文がみれる。また「くの字状」の文様ではその傾斜にあうような施文がみられ、磨消縄文ではあるが沈線によって文様を描く以前に文様を意識したとみられる施文がみられる。男性を表現したと思われるものの右側の部分は文様の両端がとじてお

らず、またこの部分だけが充填縄文となっているようである。

胴部以下の条線は細い丸棒状工具によると思われるが、男性を表現すると思われるものの側の半分にしかみられない。

内面の整形は輪積み痕が一部に残るが、よくナデが加えられる。胎土は細い砂粒が含まれ、長石、滑石等がわずかに目立つ。焼成は良好で、しっかりとした感のある土器である。色調は、暗褐色、黒褐色を呈している。

この土器の型式については、後期の安行Ⅰ式付近とする見方と晩期の安行Ⅲa式ないしはその直前とする見方などがあり、決定しにくい状態にある。ここでは、一応、安行Ⅲa式あたりとしておくが、検討を要しよう。 (小倉)

各「土偶」の法量

(単位 cm)

	高さ (現存)	肩幅	肘張	腰のくびれ	腰の張	脚の ひろがり
男性	5.2	4.4	4.2	0.7	2.8	0.7
女性	4.3	3.4	2.7	1.0	1.7	1.2

(5) 包含層出土の石器

石鏃 (図版26(2))

本調区からは20点の石鏃が出土した。材質は黒曜石、チャートなどである。形態は、①凹基無茎のもの、②凸基有茎のもの、③三角形のものなどがあるが、①が比較的多く見られた。

石棒 (図版26(2)左下、図版30(1))

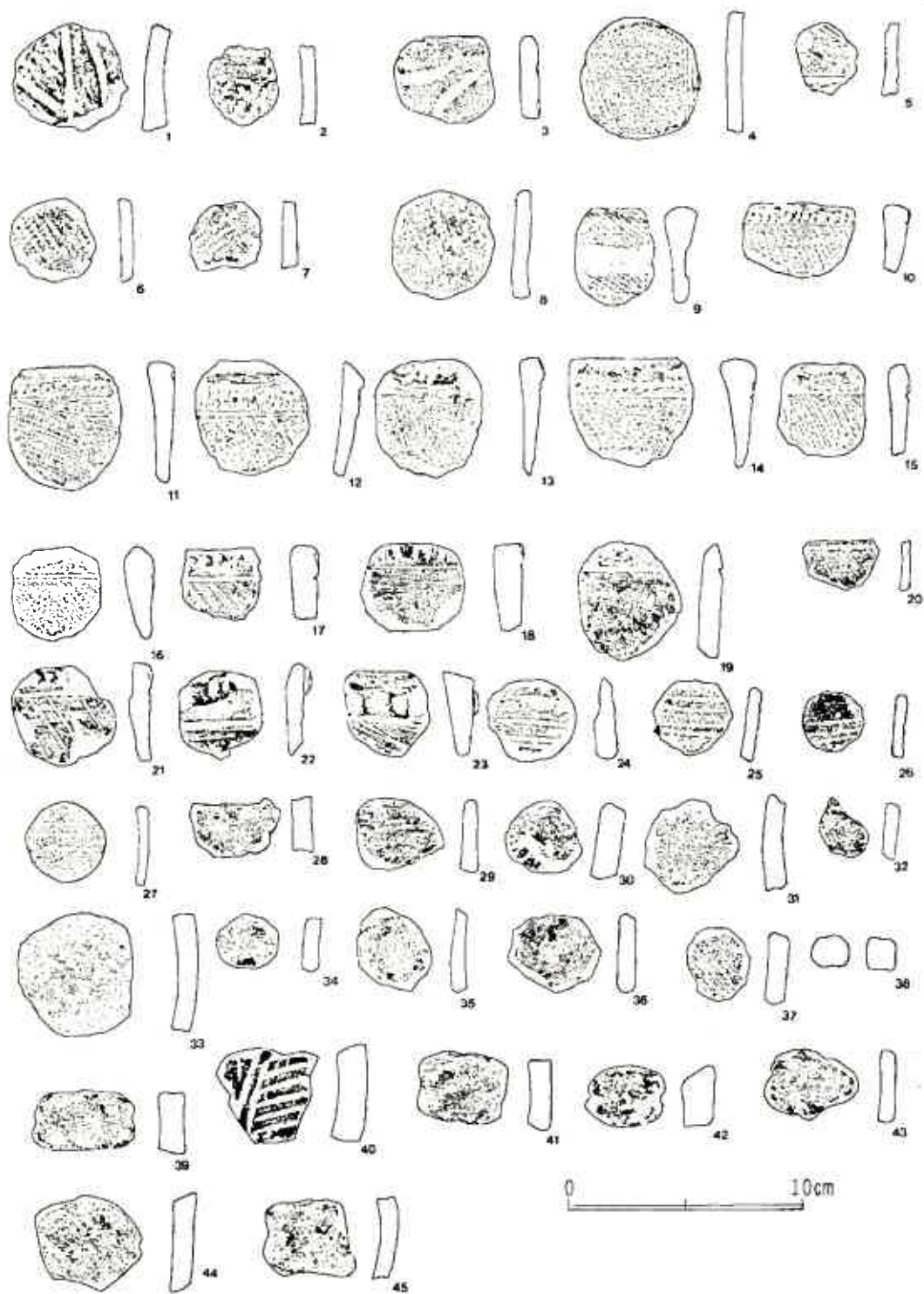
石棒と思われるものは2個体出土したが、図版26は径約4cmを測るものである。また、図版30は大型の石棒と思われ直径約20cmを測り上下部を欠損している。

石皿 (図版29)

石皿は11個体出土したが、完形品はなく、いずれも欠損しているものである。

磨石 (図版28)

磨石は6個出土した。その内完形のもの2個である。



第40图 出土土製品拓影图

敲石（図版28(1)）

敲石は5個出土した。いずれも完形で両端部に打痕が残っている。

石斧（図版27）

石斧は欠損品を含め、14点出土しており、完形品は8点、欠損品は6点を数える。形態は10cmないし15cmの長さを示す分銅形の打製石斧が主体である。（中村）

（6）包含層出土の土製品（図版26(1)、第40図、第37図19）

本遺跡から出土した土製品には耳飾、土版、土偶、土製円盤、土錘がみられた。

図版26の1列目と2列目左2点は耳飾である。いずれも環状を呈し、1列目左側には沈線によって文様が描かれる。1列目中央2点および2列目は大形となる。

2列目右側は土版である。表裏ともLRの縄文施文後、円弧状に沈線を施し、一部を磨消す。赤色顔料が一部に残っている。

3列目は土偶の脚部である。中央のものを除いて足が表現され、左側のものは指を表現しているのだろうか、沈線が2本ひかれている。中央のものは横に細沈線がひかれる。

第40図1～37は土製円盤である。土器片を利用し、周辺を打ち砕いた後磨きあげ円形もしくは楕円形にしている。大きさは2.5cm～5.4cm程となる。1～3は加曾利E、4～8は堀之内、加曾利B、9～26は安行Ⅰ、Ⅱ式の土器片を利用している。

38～45は土器片利用の土錘で土器片を長方形、楕円形に整え、切り込みを入れる。切り込みは2ヶ所（39、42、44、45）、4ヶ所（38、40、41、43）のものがみられる。大きさは38のように1.5cm程のものから40のように4.5cm程のものまでみられる。いずれも中期の土器片を利用していると思われる。

第37図19は、小形土器であり、19は口唇上に刻みをもつ突起をもつ。（小倉）

ま と め と 考 察

面積わずか45㎡、その中の出土遺物は平箱(約20ℓ入り)にして30箱、まさに驚くべき出土量である。馬場(小室山)遺跡の土器の埋蔵量は、他のいずれの遺跡をも凌駕すると言ってもよいであろう。面積の広大さ、包含層の深さ、保存状態の良さ、それらが、そうせしめているのである。

今回の調査は、遺跡全体からすれば、一つの窓を開け中を眺めたにすぎないが、その出土遺物の種類、検出遺構は、本遺跡の姿を、ほぼ正しく伝えているように思われる。

まず、関東ローム層を掘り込んで縄文時代中期後半の加曾利式土器をもつ集落跡があり、この上にそれ以後、晩期に至るまでの土壙が掘り込まれており、一部はローム面に達しているものの、大部分は厚い黒褐色土層の中で終わっている。土器は、縄文時代中期中葉の阿玉台・勝坂式土器から、晩期前半の安行Ⅲc式土器まで、ほぼ全型式が出土した。昭和44年度の調査では、前浦式土器を出土している。本遺跡を評するならば、縄文時代後半の全型式土器を包含する南関東地方屈指の遺跡とあって良いであろう。

一遺跡で土器型式が連続していることは注目すべきことである。本遺跡の場合、これまでの数回にわたる調査の結果、つぎのような土器型式が確認されている。

阿玉台・勝坂、加曾利EⅠ～Ⅳ、称名寺、堀之内Ⅰ・Ⅱ、加曾利BⅠ～Ⅲ、曾谷、安行Ⅰ～Ⅲc、前浦

これほど連続している遺跡は、他にない。浦和市内では、最近のたび重なる発掘調査で、いろいろな形の縄文遺跡が明るみに出てきたが、連続という点からみると、たとえば、前窪遺跡の場合は、後期初頭から晩期終末、大谷場遺跡の場合も同様であり、後期から晩期を通している遺跡は、一つのあり方と言えよう。本遺跡は、これに中期、しかも中葉まで加わることになるのであり、時間的な長さは相当なものとなるはずである。

中期は、集落跡として捉えられたが、後期以後は、本遺跡の性格は捉えにくい。前回の調査では、多数の土壙が検出され、土偶、土版、石棒、土製円盤などの特殊遺物

のほかには多数の石器の出土をみており、墓壙群として理解していたところである。

さて、土偶装飾付き土器は出土したときから、注目を浴びているところであるが、まさに、類例稀れな遺物と言うべきである。所属時期については、安行式土器よりも古く見る見方と、安行Ⅱ～Ⅲ式土器あたりにおく見方が、出されていた。土器が小型であり、土偶装飾に着目してしまうので、どうしても、土器からの判断はしにくい。最近では、古くもっていこうとする意見のほうが多いようである。今後も、注目されていく資料であろう。大方のご教示を賜われれば幸いである。

繰り返すことになるが、この遺跡は、関東地方南部の縄文文化（特に後半）研究のうえでは、必要にして欠くべからざる遺跡と言ってよいであろう。今後も調査を進めてゆけば、どのような遺構、遺物が発見されるか予見しがたい。それだけに、現状の保存が希求されてやまない次第である。

（青木・小倉）

〈土層説明〉

第3号住居跡土層説明（第6図）

	第1層	暗茶褐色土	（焼土粒子、ローム粒子、炭化物及び等を含み、やわらかい）
	第2層	暗茶褐色土	（基本的には、1層と同じ様相を呈するが骨片を含まず、炭化物の含有量が若干多く、よくしまっている）
	第3層	茶褐色土	（1、2層に比べ、ローム粒子の含有量が多くしまっている）
	第4層	黄茶褐色土	（炭化物ローム粒子を含み、焼土粒子を若干多く含む）
	第5層	黄茶褐色土	（ローム粒子を多く含む。他の層に比べ、焼土粒子、炭化物の含有量は少ない）
ピット内覆土	第6層	暗茶褐色土	（ローム粒子、焼土粒子を若干粒み、0.5～1cm程のロームブロックを若干含む）
	第7層	黄褐色土	（ローム粒子、を多く含む、やわらかい）
	第8層	茶褐色土	（ローム粒子を含み、若干粘性を帯びやわらかい）
	第9層	褐色土	（焼土粒子を少量含み、やわらかい）
	第10層	褐色土	（ロームブロックを含み、非常にやわらかい）

全土層 土層説明（第3図）

	第1層	表土	
	第2層	茶褐色土	（ローム粒子、焼土粒子、炭化物、骨片等を若干含みしまっている）
	第3層	暗茶褐色土	（ローム粒子、焼土粒子、炭化物、骨片等を多く含み、よくしまっている）
	第4層	黄褐色土	（ローム粒子、炭化物、骨片等を含む。ローム粒子の含有量が多い、また若干粘性を帯びよくしまっている）
	第5層	黒褐色土	（ローム粒子、炭化物、骨片を若干含有し、しまっている）
土境内覆土	第11層	暗茶褐色土	（焼土粒子、炭化物、骨片、ローム粒子を含みしまっている）
	第12層	茶褐色土	（ローム粒子を多く含み、焼土粒子、炭化物を若干含み、しまっている）
	第13層	茶褐色土	（ローム粒子、炭化物、焼土粒子、骨片を含み、しまっている）
	第14層	褐色土	（ローム粒子を多く含み、焼土粒子、炭化物を若干含む。また0.5～3cm程のロームブロックを含み、しまっている）
	第15層	茶褐色土	（0.5～1cm程のロームブロックを含み、やわらかい）
	第16層	茶褐色土	（ローム粒子を多く含み、やわらかい）

第1、2号住居跡、土層説明（第5図）

	第6層	茶褐色土	（ローム粒子、炭化物、焼土粒子、骨片をわずかに含み、しまっている）
	第7層	黄褐色土	（ローム粒子、炭化物、焼土粒子、骨片を含む）
	第8層	茶褐色土	（ローム粒子、炭化物を含み、よくしまっている）
	第9層	明褐色土	（8層と同様の土であるが、ローム粒子の包含量が多い）
	第10層	茶褐色土	（ローム粒子を若干含み、やわらかい）
	第17層	暗茶褐色土	（第48層に比べ焼土粒子の含有量が多い）
	第18層	茶褐色土	（ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含み、ローム粒子の含有量が多くよくしまっている）
	第19層	茶褐色土	（17層に比べ、ローム粒子の含有量が多い）
	第20層	褐色土	（焼土粒子、ローム粒子、炭化物を含み、18層と同様の様相を呈するが、若干ローム粒子の含有量が少ない）
	第21層	赤褐色土	（焼土粒子、炭化物、ローム粒子を多く含み、やわらかい）
	第22層	黄褐色土	（ローム粒子、焼土粒子及び1～2cm程のロームブロックを含み、よくしまっている）
	第23層	茶褐色土	（ローム粒子、及び1～1.5cm程のロームブロックを含み、やわらかい）
	第24層	茶褐色土	（ローム粒子を若干含み、やわらかい）
	第25層	黄褐色土	（ローム粒子を多く含み、やわらかい）

- 第26層 暗茶褐色土 (ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含み、やわらかい)
- 第27層 茶褐色土 (ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む。炭化物の混入率が高くやわらかい)
- 第28層 茶褐色土 (ローム粒子、炭化物を含む、ローム粒子の混入率が高く、しまりが無い)
- 第29層 茶褐色土 (ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含む、又、0.5cm程のロームブロックを含み、非常にやわらかい)
- 第30層 茶褐色土 (ローム粒子を若干含む)
- 第31層 茶褐色土 (炭化物、0.5cm程のロームブロックを含む)
- 第32層 茶褐色土 (ローム粒子、焼土粒子をわずかに含み、やわらかい)
- 第33層 茶褐色土 (ローム粒子を若干含み、非常にやわらかい)
- 第34層 黄茶褐色土 (0.5~1cm程のロームブロックを含む)
- 第35層 黄茶褐色土 (ローム粒子を多く含み、焼土粒子、及び炭化物を若干含む)
- 第36層 赤茶褐色土 (焼土粒子を多く含み、やわらかい)
- 第37層 赤黄褐色土 (1~1.5cm程の焼土ブロックを含み、よくしまっている)
- 第38層 暗茶褐色土 (焼土粒子、ローム粒子、炭化物、骨片等をわずかに、しまっている)
- 第39層 黄褐色土 (ローム粒子を多く含み、粘性を帯びている)
- 第40層 褐色土 (ローム粒子、焼土粒子、炭化物、及び1.0~1.5cm程のロームブロック、焼土ブロックを含み、しまっている)
- 第41層 赤茶褐色土 (焼土粒子を多く含み、やわらかくしまりが無い)
- 第42層 暗茶褐色土 (ローム粒子、焼土粒子、炭化物、骨片を含み、よくしまっている)
- 第43層 明茶褐色土 (ローム粒子、炭化物を含み、しまっている)
- 第44層 茶褐色土 (45層に比べ、ローム粒子の含有量が少ない)
- 第45層 茶褐色土 (焼土粒子、ローム粒子を含む)
- 第46層 茶褐色土 (47層に炭化物を加えた層である)
- 第47層 褐色土 (ローム粒子、焼土粒子、炭化物及び0.5~1cm程のロームブロックを含む)
- 第48層 暗褐色土 (ローム粒子、炭化物、焼土粒子、骨片等を含む。又、ローム粒子の含有量が多く、よくしまっている)
- 第49層 茶褐色土 (ローム粒子、焼土粒子を含む。焼土粒子の含有量が多くしまりが無い)
- 第50層 茶褐色土 (7層に比べ、ローム粒子の含有量が多い)
- 第51層 褐色土 (ローム粒子、炭化物、焼土粒子を含む。焼土粒子の含有量が多い)
- 第52層 茶褐色土 (ローム粒子、炭化物、焼土粒子を含む。焼土粒子の含有量が多い。又、1cm程の焼土ブロックを含む)

1号住居跡覆土 6~10、36、37、48~52

2号住居跡覆土 17~25、38~41

1号住居跡を切っている土壌覆土 42~47

ピット内覆土 26~35